

2021.6.20

ご報告：6/19 第 22 回働学研（博論・本づくり）研究会

十名 直喜

1 第 22 回働学研開催（6/19）のご報告

昨日（6/19）、第 22 回働学研が開催され、下記 23 人にご参加いただきました。2 つの分科会で 7 本の研究発表がなされ、活発な質疑応答がみられました。

伊藤、太田、小野、金井、片山、聴濤、木林、熊坂、小林、佐藤、澤、高松、槌田、程、中谷、濱、平松、藤井、堀、三輪、安林、横田、十名

1 本あたり発表・議論を込みで 25 分。参加者には事前に発表資料を開示し、それをふまえ発表は 10～15 分程度でお願いするも、時間内に収めることは至難です。

発表時間がオーバーすると、その分、質疑応答の時間が短くなります。活発な議論を引き出しつつ時間内にどう収めるか。時間&論点をめぐるギリギリのせめぎ合いと熱気のなか、3 時間がアッという間に過ぎていきました。

質疑応答の時間が限られている中、研究会の終了後に、参加者（澤さん）、発表者（藤井さん）からコメントをいただいています。報告資料の最後に添付していますので、ご覧ください。

2 第 22 回 働学研（博論・本づくり）研究会プログラム

発表（10～15 分）＋議論（10～15 分）＝25 分/本：計 180 分、司会：十名

第 1 分科会 環境・社会・統治（ESG）への視座と歩み

藤井敏夫「A 県の環境行政 30 年の体験と問い—4 つのエピソードをふまえて」

安林奈緒美「外国籍の子どもと向き合う—学校内におけるマイノリティと地域」

高松平蔵「気の長い投資—ドイツの地域社会の信頼性を高める地元経済」

濱 真理「博論の口頭試問を終えて—「公共政策の合意形成過程」

第 2 分科会 コロナ禍と ICT が問い直す企業と労働のあり方

小林伸孝「分散型企業組合の構造と課題—コロナ禍と「協同労働」法制化をふまえて」

片山勝己「企業内学校と工具研究の連携」

太田信義「テレワークに見る経済活動の諸相—製品設計・開発現場の実情調査（第 4 報）」

発表者へのお願い

月例会発表資料のうち、定常的に開示しても OK の方は、お知らせください。著者別研究紹介のフォルダに移しますので。

7本の発表資料は、作成途上や試論が多く、対外秘とみられる資料もあります。そのうち、2本は働学研共有フォルダで開示してもいいのではと思います。安林さんの資料は、ご本の紹介ゆえ。高松さんの資料も、ご本などで開示されている点も多いので許容範囲内では。お二人からの返信をふまえて対処します。

3 働学研月例会の趣旨と今後の進め方

次回からの進行役（司会、画面操作）

次の7/24第23回働学研から、画面操作（澤）、司会（十名）で進めていきます。

発表資料のアップ（画面共有）と操作は、発表者をお願いし、それが難しい場合、これまで司会の方で行ってきました。今回も、7本のうち4本を司会の方で操作しています。

ただ、司会と画面操作の兼用は大変です。それをみかねた澤さんから、「画面操作はやりましょう」と救いの手を差し伸べていただきました。誠に有難く、次回から2人コンビで進めていきますので、よろしくお願いします。

2 桁近い研究発表方式の月例会 ―働学研の趣旨と特徴

なお、3時間で7本をこなすというのは、大変なことです。研究会や学会（部会）でも、3時間で1〜2本の発表というスタイルが一般的とみられます。

働学研の月例会では、これまで数本〜10本/回をこなしてきました。9本/回を数か月続けるなか、「もう少し時間にゆとりを」との声もあり、6〜7本/回で再開したところです。

働学研の月例会で、これだけ多くの発表を行うのは、なぜか。博論や本づくりに挑戦されている社会人研究者や大学人が2桁にのぼるからです。これからの人、さらなる高みをめざされる方も、少なくありません。自らの仕事・研究・人生論としてまとめた方もおられますので。

働学研の月例会は、そうした多彩かつ多様な研究や思いを披露し交流する場となっています。そえゆえ、1回9本でもこなされません。限られた時間と溢れる研究心のなかでのギリギリのせめぎ合いが、凝縮した交流と熱気を生み出していると感じています。

7/24第23回働学研の発表者募集

次回月例会は、2021年7月24日 02:00 PM からです。

発表をご希望の方は、十名（tona@iris.eonet.ne.jp）までお知らせください。

よろしくお願いします。お大事に。（十名）

<付記> 6/19第22回働学研へのコメント・感想

(1) 藤井敏夫「環境容量とコモンズ」2021.6.19

「今回の報告、時間管理不十分で、中途半端になり申し訳ありませんでした。

太田さんのご質問にお答えします。「大気汚染物質の環境容量」と4のコモンズにおける環境資源との関係のご質問でした。

大気汚染物質が発生するのは、空気燃焼に伴うものであり、かつては、硫黄酸化物であり、今は二酸化炭素が問題視されています。すなわち、大気（空気）という環境資源（循環資源でもある）の適正管理という視点で大気汚染物質管理を考えようということです。（化石燃料の使用量は、その指標ととらえればいい）。そのことにより、環境資源の管理を目指すコモンズの考え方の深化が図れると思います。

今日コモンズのところでお話しできなかった点を付け加えます。

1 経済学は、社会経済活動量を貨幣で表現しますが、物質総体に着目した社会経済活動表現として例えば、日本全体の物質フローが環境白書に掲載されています。1年間の海外からの資源等輸入量は約10億トン（原油、食料、鉱物等）で国内資源量10億と併せて20億トンの物質量が国内を巡っています。日本からの製品輸出量は1億トンです。日本における脱炭素社会づくりや循環経済化に向けて、この現実を直視することが不可欠と考えます。

2 地域自立（地域の広がり、自立の程度は様々）を目指すコモンズの形成において、エネルギー面の自立化が重要と言われています。コモンズにおいては、人、モノ、金の地域循環度を高める必要がありますが、多くの地域では、エネルギー消費支出がマイナスであり、したがって、エネルギーの自給度を高めることが、コモンズにおける大きな課題となっています。」

(2) 澤稜介「太田報告へのコメント」2021.6.19

「本日ご発表をお聞かせいただきありがとうございます。いつも大変多くのことを学ばせていただいております。

大変恐縮ではございますが、本日拝聴したうえでの学び、気づきを書かせていただきました。働学研内でお話しさせていただきたかったのですが、時間がなくメールでのご無礼をご容赦ください。

太田先生のご発表からの学び・気づき

事例に挙げられていた企業のように社内での知の共有化によって、社内プロセスを効率化（テンプレ化し、全社的にベースアップする）することで、スピードアップはもちろんのこと社外への新たな価値提供に繋げ、DXが図られている。それはテレワークによって加速した、と学ばせていただきました。

太田先生のアウトソーシング論の自前産業からの脱却を踏まえ、産業全体で考えた時にテレワークや、社外とのテレカンファレンス（外部との接触容易化）を機に、外部との交流をより深め、暗黙知（自社の強み）と形式知のオープン化のバランスをうまく取り、産業全体で知の共有を図ることが今後の日本の競争力向上につながると感じました。

余談ではございますが、最近では武蔵精密工業という部品サプライヤーが、情報（ビッグデータ）の重要性を意識して、AIなどを積極的に外部から取り入れられていることを知り、このような企業がどんどん増えていくことを非常に期待しつつ、自身としても促す立場として積極的に活動しなければと感じております。

未熟な理解でこのようなコメントをお送りしてしまい、大変申し訳ございませんが、ご一読いただけますと非常に幸いです。よろしくお願いいたします。」

(3) 十名直喜「出席者確認のお礼とご発表へのコメント」2021.6.19

「早速、出席者の確認をお送りいただき、ありがとうございます。

太田さん、濱さん、本日はすばらしいご発表、ありがとうございました。

太田さんのテレワーク論は、日本的な働き方をどう捉えどう変えていくかに隠されたテーマがあると感じています。暗黙知と明示知の好循環をどう創り出していくかが問われているようです。

濱さんのご発表は、博論をめざす人たちに大きなインパクトを与えたとみられます。名学大の博論審査のあり方に勇気づけられた人も多かったと感じています。程さんも含めて。

これまでにない知の伝承がなされているといえましょう。

これからもよろしくお願いいたします。」